
隣の部屋に出た化物の話

ZOT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣の部屋に出た化物の話

【Nコード】

N3372W

【作者名】

ZOT

【あらすじ】

ある男性による独白。

「絹を裂くような女の悲鳴が隣の部屋から聞こえた。壁を殴るような鈍い音の後、一旦は静かになったものの今度は別の音がやかましい。音から察するにもはや手遅れだろう。僕は外に出て隣の部屋の扉を遠慮がちに叩く。地を這うような男の声が聞こえた。ドアノブを回し、部屋に入った。ああおかまいなく」

「そう言つて僕は写真を撮った。どうやらそこには男も女も無く単なる一体の生物が居るようだ。少なくとも人間ではないように見える。こんな生き物は見た事が無かった。ひとしきり写真を撮ると、形ばかりの礼を言つておく。途端、その生き物の上半分が千切れて襲い掛かつてきた。何か気に触つたのか」

「ああ落ち着いてください、言葉が通じるかはわかりませんが。言つても奇怪な鳴き声を上げるばかりだ。この生物は人語を理解しないらしい。金属質にきらめく爪のような器官を振り回し始める生き物。見る限りは殺傷能力がありそうだ。僕は急いで部屋を出て扉を閉めた。木製の扉を生物の爪が突き抜けた」

「扉を軋ませているが、爪が抜けなくなっているらしい。僕は急いで隠れる場所を探した。犬のように臭いで探されはしないか、いや、迷っている暇は無い。自分を奮い立たせ、もつれる足で僕はとにかく駆け出す。アパートの裏手にある倉庫の裏に隠れた。幸い写真を撮る為に携帯電話を持ってきたのだ」

「警察に電話をしたがまともに取り合ってもらえない。仕方が無い。肉の塊のような生き物が襲い掛かつてくるなどともな神経では信じられない。僕は住所を言い、とにかく来てくれと声をひそめ

て頼み込んだ。返事を聞かずに通話と共に携帯電話の電源を切る。荒い息と、砂利を踏む音が聞こえたからだ」

「あの悲鳴を上げた女性は見当たらなかった。あの生き物に食われてしまったのだろうか。もしそうなら、僕も……。今更血の気が引いた。傍にあつた木材を手取る。歯を噛み締めて息を殺す。肉の塊のようだったから、打撃でもある程度ひるませる事は出来るはずだ。たとえ倒せなくても、逃げられる」

「音の方向へと目をやった。月の光を反射させる爪が見えた。奴はこちらとは違う方向へと進んでいる。僕に気がついていない。見つければどうなってしまうか……。考えるだけでも恐ろしい。僕は出来るだけ速く音を立てないように、奴に近づいた。木材を振り上げた瞬間、振り返った様に見えた」

「一撃を加えると奴は赤い体液を噴き出した。潰れたようになってくぐもった鳴き声を上げる不気味な生き物。これは、こいつを倒せるのではないか。もう一度同じ位置へと木材を叩き込んだ。痙攣するように震える生き物から爪を剥ぎ取る。意外と簡単に奪う事が出来たその爪は、よく見ればナイフだった」

「この生物は物を取り込んで自分の一部にする生態があるのだろうか。何にせよこいつは明らかに脅威だ。完全に動きが止まるまで、僕は生き物を暴行し続けた。それから部屋の前へ戻った。女性の悲鳴が上がった部屋だ。もしも女性が生きているなら、救急車を呼んだ方が良いだろう。開いている扉から入る」

「誰か居ますか、と言いながら部屋を見回した。よく見えないので、手に触れた電灯のスイッチらしきものを作動させた。暗闇に慣れた目を焼くような、強い光が部屋を照らした。思わず悲鳴を上げてし

まう。それが悪かったのか、足が何かにつかまれた。見ればそれは、なんとあの肉の塊の片割れだったのだ」

「僕は今度こそ本格的に悲鳴を上げた。木材で足を取り込まんとする生物を殴打する。すっかりと忘れていた。奴は分裂して上半分で僕を追ってきたのだった。一度目の打撃で奴が足から離れたが、こんな危険な生き物を生かしておく事は出来ない。震えて細い鳴き声を上げる生き物を見て、少し良心が痛んだ」

「かわいそうに思った僕は庭に穴を掘って生き物を埋めた。その上に木材を立てて、簡素ながら墓を作っておいた。結局女性は見つからなかった。きっとあの生き物に取り込まれてしまったのだろう。申し訳程度に部屋を片付けて、扉を閉めておいた。自分の部屋に戻って椅子に座り携帯電話の電源を入れた」

「落ち着いてよく見てみればあの生き物の体液が服に付いているではないか。気分が悪いのでさっさと脱いで風呂に入った。風呂に入っていると呼び鈴が鳴った。簡単に体を拭いて服を着、お客に会うべく扉を開ける。驚いた事に、そこには警察官が立っていたのである。警察手帳を見せて身分を示している」

「やはり頼み込んだのが良かったのだろう。僕は警察官を部屋に招き入れて話をした。携帯電話で撮った写真を見せた時の、あの驚いた顔が忘れられない。自分の言った事が信じてもらえるというのは嬉しいものだ。しばらく黙った後、奴の墓を見せて欲しいと言う。もう夜も遅いので明日にして欲しかった」

「しかし相手は国家権力である。僕は案内せざるをえない。しぶしぶ案内するとなにやら無線で連絡を取り始めた。未確認生命体だから、きつと研究機関が何かに送るのだらう。すぐにパトカーがやつ

て来て数人の警察官が走ってきた。話を聞くと、どうやら僕も同伴する必要があるらしい。何故だろうか」

「そう思ったのが、やはり僕は逆らう事ができない。警察署に連れて行かれた。パトカーの中では今回の武勇伝でも話そうかと思っただけれど、話は署で、の一点張りだった……。それからあれよあれよの内に僕の行動が評価されたくこの部屋を貰ったんです。ここは良いですね、衣食住が保障されている」

「でも毎日あなたと話をしないといけないなんて……変わった場所なんですね。いえ、失礼しました。あなたと話をする事が不快だというわけではなくて、ただ変わってるな、と。あの生き物は結局何だったんですか。やっぱりUMAの類だったんでしょうかね。はあ、よくわかっていない……。そうですか」

「ともかく、これで僕の話はおしまいです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3372w/>

隣の部屋に出た化物の話

2011年10月9日15時56分発行